キーツとワーズワース

―手紙におけるワーズワース―

永　井　豊　実

序

キーツは1815年の秋，3月に出版されたワーズワースの八つ折り判2巻を手にしている[1]。このワーズワース詩集は1798年に出版されていて，*Lyrical Ballads* と数篇の新しい詩を含んでいる。キーツはこれを愛読していたようで，手紙の中で幾つかの詩行を引用している。手紙におけるワーズワースへの言及や詩行を調べてみることは，キーツのワーズワースへの意識を知ることになり，更にキーツ自身の詩作態度の一面を知ることにもなる。もう一方にシェークスピアがおり，両者への思考がどのようなものであったかを知ることで均衡がとれるのであるが，とりあえずワーズワースについてのキーツの言及と関連あるものや必要と思われるものを年代順に調べていってみて，キーツの詩作意識の変遷の一部を窺(うかが)ってみたい。(既に幾つかの著作にキーツとワーズワースについては述べられている[2]ので，同じことの繰り返しになりがちだが，私なりに原文をあげて，再確認していき，次のステップにしておきたい。)

〔1〕 1815年 (キーツ19歳)

キーツは12月に *Epistle to George Felton Mathew* として詩を書いている。Robert Gittingsによると，この詩の中に出てくる the bee とか the fox-glove とかはワーズワースから単に借りたのではなく，例えば "Nature's observatory" というような扱い方や言葉は全く本来の Wordsworthian なものだと言っている[3]。キーツの詩を読み，そしてワーズワースの詩を読むと似たような言葉を幾つか見い出す。キーツは本来ワーズワース的な要素を持っていたのかも知れず，ワーズワースの詩集を手にすることによって，自らの指向を再確認していったのではないかと思う。実際にワーズワースへの言及が出てくるのは，ちょうどこの年の一年後になる。

〔2〕 1816年（キーツ20歳）

(1) 1816年11月20日 To B. R. Haydon では次のような詩を書いている。

Great Spirits now on Earth are sojourning
  He of the Cloud, the Cataract the Lake
  Who on Helvellyn's summit wide awake
Catches his freshness from Archangel's wing
He of the Rose, the Violet, the Spring
  The social Smile, the Chain for freedom's sake:
  And lo!—whose stedfastness would never take
A Meaner Sound than Raphael's Whispering.
And other Spirits are there standing apart
  Upon the Forehead of the Age to come;
These, These will give the World another heart
  And other pulses—hear ye not the hum
Of mighty Workings in a distant Mart?
  Listen awhile ye Nations, and be dumb! (*The Letters* I, p. 117)[4]

ロリンズ（Rollins）の注[5]によると "Great Spirit" は Wordsworth, Hunt, Haydon となっていて，ワーズワースは2-4行，ハントは5-6行，ヘイドンは7-8行でほのめかしている。ワーズワースは「雲や滝や湖の詩人で，ヘルベリンの山頂に立ち，目を見開いて，大天使の翼から新鮮な息吹を吸っている人[6]」となっている。

(2) 同じ詩（多少大文字が小文字になっている等の違い）が11月20日付けで，To B. R. Haydon に出されている。その前書きの中で，

The Idea of your sending it to Wordsworth put me out of breath—you with what Reverence—I would send my Wellwishes to him— (*The Letters* I, p. 118)

「君がワーズワースにこの詩を送るという考えに息がつまった。どんな尊敬の気持を抱いているかよく分るだろう。よろしく言い送りたい。」と言っている。ワーズワースに寄せる気持が相当高まって，尊敬の念を抱く程になっている。ロリンズの注[7]によると，キーツはこのソネットを

別の紙に書いて，ワーズワースに送ってもらうつもりだった。ところがヘイドンは手元に留めていて，1ケ月後の12月31日に自分で書いたコピーを送っている。その返事に1817年1月20日付でワーズワースは，「このソネットは前途ある詩だと思う。勿論，あなたも私も，この詩で高く誉められているので，全くの公平な判断がなされているとは思われませんが，確かに力強く考案されたもので，よく表現されております。リー・ハント氏の賞賛も十分値いします。このソネットは非常によくまとめられています。」とお世辞にもワーズワースは誉めている。ギティングスによると，この詩はワーズワースの *"Great Men have been among us"* と似ていて "Great spirits now on earth are sojourning" は過去の偉人ではなく，現在の偉人を見ていると言っている[8]。キーツの意識の内になにかもじって書いたような節も伺われるような気がするが，こんなところにもキーツのワーズワースへの傾倒が伺われる。この後 *"Sleep and Poetry"*, *"I stood tiptoe"* を書いている。ギティングが言うに "On a lone winter evening, when the frost/Has wrought a silence," は Wordsworthian だと言っている[9]。

〔3〕 1817年 (キーツ21歳)

(1) 1817年4月15日 To George and Tom Keats で，ワイト島へ向う途中 Southampton で書いている中で，

> You, Haydon, Reynolds &c. have been pushing each other out of my Brain by turns—I have conned over every Head in Haydon's Picture— (*The Letters* I, p. 129)

とある。「君，ヘイドン，レノルズ等々が僕の頭の中からかわるがわる押し出てきている。ヘイドンの絵の中で顔を調べてみた」と言っているが，ロリンズの注によると顔はキーツ，ワーズワース，ハズリット，恐らくビューウィクが含まれている[10]」と書いてあり，キーツはヘイドンの 'Christ's Entry into Jerusalem' 「エルサレムに入るキリスト」の絵に描かれるワーズワースの肖像画のことを言っている。ついでに4月17日，18日のレノルズ宛の手紙では，ワイト島でのことを述べて，18日に *Endymion* を書き始めると言っている[11]。

(2) 1817年5月10，11日 To B. R. Haydon の中の11日の日曜午後の所で，

> I am glad you are hard at Work—'t will now soon be done—I long to see Wordsworth's as well as to have mine in: (*The Letters* I, p. 143)

「仕事に精を出しているようでうれしい。じき終るでしょう。自分のもそうだがワーズワースの

顔も見たい。」と言って，ヘイドンの Christ's Entry に描かれるワーズワースの顔を見たがっている。そしてシェークスピアについて述べた後

'T is good too that the Duke of Wellington has a good or so in the Examiner A Man ought to have the Fame he deserves—and I begin to think that detracting from him as well as from Wordsworth is the same thing. I wish he had a little more taste—

(*The Letters* I, p. 144)

「エグザミナーでウェリントン公が一言二言よく言われているのはいいことです。人は自からに値いする名声をもってしかるべきです。彼を非難するのは，ワーズワースを非難するのと同じだと思いはじめています。ただウェリントン公は，もう少し趣味があればよかったのですが[12)]」とあり，最後の方で，

Give my Respects the next time you write to the North and also to Jorn Hunt—

(*The Letters* I, p. 145)

「今度北の人やジョンハントにも手紙を書く時は，宜しく言って下さい」と，the North と言ってワーズワースをほのめかし，思慕の情を表わしている。

(3) 1817年8月 To B. R. Haydon（木曜の朝とあるので恐らく8月21日か28日かとロリンズは見ている）の中で，

I met a friend the other day who had seen Wordsworth's House the other Week—

(*The Letters* I, p. 149)

「先日，ワーズワースの家を何週間前に見たという友人に会いました。」と言っているので，ワーズワースの家の様子を伺ったに違いない。

(4) 1817年9月 To J. H. Reynolds の中で Oxford より出した手紙で，

"Wordsworth sometimes, though in a fine way, gives us sentences in the Style of School exercises—for Instance

The lake both glitter
Small birds twitter &c.

Now I think this is an excellent method of giving a very clear description of an

interesting place such as Oxford is—　(*The Letters* I, pp. 151～2)

「ワーズワースは時々，うまい方法だが学校の作文みたいな形で文章を見せてくれる。例えば，湖は輝き，小鳥は歌う等々と。オックスフォードのような興味ある場所をうまくはっきり書き表わすには，これは素晴しい方法だと思う。」と，ワーズワースの "*Written in March, While Resting on the Bridge at the Foot of Brother's Water*[13]" (『兄弟湖のふもとの橋にたたずみて，三月に書ける詩』) の句を引用して書いている。その詩を一部引用してみると，

The Cock is crowing,／The stream is flowing,／The small birds twitter,／The lake doth glitter,／The green field sleeps in the sun ; ／The oldest and youngest／Are at work with the strongest;／The cattle are grazing,／There are forty feeding like one ![14]　(ll. 1-10)

となっており，キーツの詩は

The Gothic looks solemn,—
The plain Doric column
Supports an old Bishop & crosier ;
The mouldering arch,
Shaded o'er by a larch,
Lives next door to Wilson the hosier　(*The Letters* I, p. 152 ll. 1-6)[15]

と続いており，相当ワーズワースを意識しておりうまくスタイルを模倣している。

(5) 1817年9月14日 To Jane and Mariane Reynolds で Oxford より My dear Jane と書き出された中で，

Believe me, my dear Jane it is a great Happiness to me that you are in this finest part of the year, winning a little enjoyment from the hard World—in truth the great Elements we know of are no mean Comforters—the open Sky sits upon our senses like a sapphire Crown—the Air is our Robe of State—the Earth is our throne and the sea a mighty Minstrell playing before it—able like David's Harp to charm the evil spirit from such Creatures as I am—able like Ariel's to make such a one as you forget almost the tempest-cares of Life. I have found in the Ocean's Musick—varying

(though selfsame) more than the passion of Timotheus, an enjoyment not to be put into words and "though inland far I be". I now hear the voice most audibly while pleasing myself in the Idea of your Sensations. (*The Letters* I, p. 158)

「本当に，ジェイン，あなたが今一年で一番いい時に，辛い世の中から幾らか楽しみを得ているかと思うと，僕にとってはとても幸わせです。実際，我々が知っているこの偉大なる自然(エレメント)は，なみなみならぬ慰安者であります。開けた空は我々の感覚の上にサファイアの王冠のようにのり，大気は堂々とした衣服であり，大地は玉座であり，海は大地の前で演ずる力強い吟遊詩人であります。まるでダビデの竪琴(ハープ)のように，僕のような人間からも悪しき魂を魅惑することができ，エリアルの竪琴(ハープ)のように，あなたの様な人にも人生の嵐を忘れさせることもできるのです。僕は大海の音楽の中に，ティモシアスの情熱よりも更に変化に富んだ（それでいて同一の波だが），言葉では言い表わせない喜びを見い出します。そして今『内陸遙か奥におれど』，僕はあなたの感激を思うと嬉しくなり，波の音がまるで耳に聴えてくるように思えます。」とワーズワースの *"Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood"*（以下[16] *Ode: Intimations of Immortality* とする）の line 166, "Though inland far we be" を引用している[17]。遙か内陸のオックスフォードより，ジェインの海岸での生活を思い浮べて『不滅の賦(オード)』の一句を引用しているが，キーツは後になってもしばしばここから引用している。

(6) 1817年9月21日 To J. H. Reynolds で Oxford より出した手紙の中で，

For these last five or six days, we have had regularly a Boat on the Isis, and explored all the streams about, which are more in number than your eye lashes. We sometimes skim into a Bed of rushes, and there become naturalized riverfolks,—there is one particularly nice nest which we have christened "Reynolds's Cove"—in which we have read Wordsworth and talked as may be. (*The Letters* I, p. 162)

「ここ五六日，アイシス川にいつもボートを浮かべ，あらゆる支流を探索した。それはもう君の睫毛よりも数があるんだ。時々藺(イ)草の茂みの中に漕ぎ入れて，そこで土地の川辺の民となり，『レノルズの入江』と名付けた特別の素晴らしい棲(すみか)があって，そこでいつものようにワーズワースを読んだり，語ったりするんだ。」と書いている。ワーズワースの詩集を手にして舟遊びに興じている風景が目に浮かぶ。そして更に

He agrees with the Northern Poet in this, "He is not one of those who much delight to season their fireside with personal talk"— (*The Letters* I, p. 163)

「彼は北方の詩人にはこう同意するんだ。『ひとり暖炉の前で，人を思って語りかける人でない』」とワーズワースの *"Personal Talk"* の最初の行を引き出している。そこでは，人のことをとやかく思うよりは，長い長い沈黙の中に，愛する暖炉の前で炎の燃える音や，やかんの鳴る音に聴き入った方がいいと第一節では言っている[18]。第II節の中の "—sweetest melodies／Are those that are by distance made more sweet;" (II, ll. 25-6) の句なんかは，キーツの *Ode on a Grecian Urn* の "Heard melodies are sweet, but those unheard／Are sweeter;" (II, ll. 1-2) を思い起こす程キーツの中に読み込まれていて，血肉となっているように思われる。そして同じ手紙で，

> Have you heard from Rice? Has Martin met with the Cumberland Beggar or been wondering at the old Leech gatherer? (*The Letters* I, p. 166)

「ライスから便りがあったかい。マーティン[19]は the Cumberland Begger に出合ったかい。それとも the old Leech gatherer に感心していたかい。」とワーズワースの *"Old Cumberland Beggar"* と *"Resolution and Independence"* を挙げている。

(7) 1817年10月8日　To Benjamin Bailey の中で，

> I am quite disgusted wish literary Men and will never know another except Wordsworth—no not even Byron—Here is an instance of the friendships of such—Haydon and Hunt have known each other many years—now they live pour ainsi dire jealous Neighbours. (*The Letters* I, p. 169)

「私は本当に文学者はいやになっている。ワーズワース以外は他に知りたくない。バイロンでさえいやだ。ここにそのような友情の例があるんだ。ヘイドンとハントはお互いに数年前から知り合っている仲だが，今やいわば嫉妬する隣人なんだ。」と友人達の互いの貶(けな)し合いに，ほとほと嫌気をさしていることを述べている，しかしワーズワースは別だという。まだワーズワースに会っていないので，人間関係の患わしさを覚えていず，ただ純粋に詩を通してしか見ていないので，ある面で詩に心酔していたものと思われる。同じ手紙の中で，エンディミオンのような長篇詩を書くのは何故かということで，

> Besides a long Poem is a test of Invention which I take to be the Polar Star of Poetry, as Fancy is the Sails, and Imagination the Rudder. (*The Letters* I, p. 170)

「その上，長篇詩は創作の試練であって，それは詩の北極星だと思う。空想が帆であり，想像力が舵であると同じようにね。」とキーツの Fancy や Imaginasion についての考えを言い表わして，次第に詩における想像力を見極めていくことになり，しいてはワーズワース批判に繋がっていくのである。

(8) 1817年10月28日—30日 To Benjamin Bailey の中で，

—and I wish I had a heart always open to such sensations—but there is no altering a Man's nature and mine must be radically wrong for it will lie dormant a whole Month—This leads me to suppose that there are no Men thouroughly wicked—so as never to be self spiritualized into a kind of sublime Misery—but alas! 't is but for an Hour—he is the only Man "who has kept watch on Man's Mortality" who has philantrophy enough to overcome the disposition to an indolent enjoyment of intellect—who is brave enough to volunteer for uncomfortable hours.x You remember in Hazlit's essay on commonplace people—He says they read the Edinburgh and Quarterly and think as they do" Now with respect to Wordsworth's Gipseys I think he is right and yet I think Hazlitt is right and yet I think Wordsworth is rightest. Wordsworth had not been idle he had not been without his task—nor had they Gipseys—they in the visible world had been as picturesque an object as he in the invisible. The Smoke of their fire—their attidudes—their Voices were all in harmony with the Evenings—It is a bold thing to say and I would not say it in print—but it seems to me that if Wordsworth had thought a little deeper at that Moment he would not have written the Poem at all—I should judge it to have been written in one of the most comfortable Moods of his Life—it is a kind of sketchy intellectual Landscape—not a search after Truth—nor is it fair to attack him on such a subject —for it is with the Critic as with the poet had Hazlitt thought a little deeper and been in a good temper he would never have spied an imaginary fault there.

(*The Letters* I, pp. 173-4)

「そして，僕はいつもこのような感動に心を開いていたらいいなと思う。しかし人間の性格なんて変えられないし，僕の性格は本来悪いに違いない。何故なら一ケ月もうとうとまどろんでしまうだろうから。ということは全く悪い人間はいないと思ってもいい。魂を清められた人は，一種の崇高な不幸に陥ることは無いのだから。しかしああ！たった一時間に過ぎないのだが，彼だけが『人間の死を見続けた』人なのだ。彼は十分博愛精神をもって，知性の怠惰な楽しみにひたり

たくなる気持に打ち勝ったし，勇敢にも，自ら進んで嫌な時間にも立ち向ったのだ。覚えているでしょうが，ハズリットの評論の中に，平凡な人間について書いたものがある。人はエディンバラ季刊誌を読んでも，勝手に思うだけなんだと言っている。さてワーズワースの『ジプシー』についてだが，僕は彼が正しいと思う。しかもハズリットも正しいと思うし，ワーズワースもまた更に正しいと思う。ワーズワースは怠惰ではなかった。決して仕事をしていなかったのではなかった。そして彼らはジプシーを持たなかった。目に見える世界において，絵のように美しい光景であったであろうが，ワーズワースの目にも見えなくても，そうであったであろう。火を焚く煙が，彼らの仕草が，彼らの声が，夕暮と調和していた。あのように言うのは大胆なことだし，印刷にして言うことも僕にはできない。しかし思うに，ワーズワースがもしあの瞬間，もう少しでも深く考えていたならば，決してあの詩を書かなかったであろう。あの詩は彼の人生の中で，最も心安まる気分の中で書かれた詩だと判断したい。あれは一種のスケッチ風の知的風景なのだ。真実を求めての詩ではない。そしてこんな話題で彼を攻めるのは正しくない。なぜなら，詩人と同時に批評家の気持でいるから。もしもハズリットがもう少し深く考えていたら，そして機嫌がよかったら，あの詩に想像力の欠陥などを窺うことはしなかっただろうに。」

この中で "who has kept watch on Man's Mortality" はワーズワースの *"Ode: Intimations of Immortality"* の 202行の "that hath kept watch o'er man's mortality;" (W.P.W., p. 462) を引用している[20]。そして *"Gipsies"* についてハズリットが,「ジプシー達は四六時中何もしないとワーズワースが言っているが，自分は一体何をしていたのか，花を愛でたり，詩を書いていたのか，ジプシー達は綿糸工場で働いているではないか。ジプシー達の方がワーズワースの詩よりもずっと興味があり楽しませてくれる[21]」と言っていることに弁護して，更に，ワーズワースのスケッチ風の知的風景の詩とみて，最も心安まる気分の時に書かれた詩だと見る，といいながらキーツの詩作態度の同調も伺わせている。雰囲気の中に溶け込んで，考えるのではないと。

(9) 1817年11月3日 To Benjamin Baily では，Blackwood の Edinburgh Magazine (1817年10月号) でのハントへの中傷文に対して，

> These Philipics are to come out in Numbers—calld 'the Cockney School of Poetry' There has been but one Number published—that on Hunt to which they have prefixed a Motto from one Cornelius Webb Poetaster—who unfortunately was of our Party occasionally at Hampstead and took it into his head to write the following—something about—"we'll talk on Wordsworth Byron—a theme we never tire on and so forth till he comes to Hunt and Keats. (*The Letters* I, p. 180)

「こうした烈しい攻撃文は続々と出てくることでしょう。『コックニー詩派』と言われてね。た

だ1号だけが出版されただけで，ハントについては，ヘボ詩人のコーネリアス・ウェブの題辞を表題に掲げておいて，ハントを中傷しているのですがね。このウェブ，不幸にもハムステッドのパーティに時々出てくるんだ。そして次の様なことを書こうと思いつくんだ。『ワーズワースやバイロンについて語る』とか何とかをね。そのテーマはあきないし，最後にはハントやキーツにまで及ぶんだ。」と書いている。当時，ワーズワースやバイロンは茶の間の話題として好まれていたようだ。

(10) 1817年11月22日　To Benjamin Bailey

この手紙はキーツの想像力に対する基本的な考え方を示しているのでその大部分を調べてみて，ワーズワースに関する所を調べてみる。

I wish you know all that I think about Genius and the Heart—and yet I think you are thoroughly acquainted with my innermost breast in that respect or you could not have known me even thus long and still hold me worthy to by your dear friend. In passing however I must say of one thing that has pressed upon me lately and encreased my Humility and capability of submission and that is this truth—Men of Genius are great as certain ethereal Chemicals operating on the Mass of neutral intellect—by 〔=but〕 they have not any individuality, any determined Character. I would call the top and head of those who have a proper self Men of Power—

But I am running my head into a Subject which I am certain I could not do justice to under five years study and 3 vols octavo—and moreover long to be talking about the Imagination—so my dear Bailey do not think of this unpleasant affair if possible—do not—I defy any harm to come of it—I defy—I'll shall write to Crips this Week and request him to tell me all his goings on from time to time by Letter whererever I may be—it will all go on well—so dont because you have suddenly discover'd a Coldness in Haydon suffer yourself to be teased. Do not my dear fellow. O I wish I was as certain of the end of all your troubles as that of your momentary start about the authenticity of the Imagination. I am certain of nothing but of the holiness of the Heart's affections and the truth of Imagination—What the imagination seizes as Beauty must be truth—whether it existed before or not—for I have the same Idea of all our Passions as of Love they are all in their sublime, creative of essential Beauty—In a Word, you may know my favorite Speculation by my first Book and the little song I sent in my last—which is a representation from the fancy of the probable mode of operating in these Matters—The

Imagination may be compared to Adam's dream—he awoke and found it truth. I am the more zealous in this affair, because I have never yet been able to perceive how any thing can be known for truth by consequitive reasoning and yet in must be—Can it be that even the greatest Philosopher ever arrived at his goal without putting aside numerous objections—However it may be, O for a Life of Sensations rather than of Thoughts! It is 'a Vision in the form of Youth' a Shadow of reality to come—and this consideration has further convinced me for it has come as auxiliary to another favorite Speculation of mine, that we shall enjoy ourselves here after by having what we called happiness on Earth repeated in a finer tone and so repeated—And yet such a fate can only befall those who delight in sensation rather than hunger as you do after Truth—Adam's dream will do here and seems to be a conviction that Imagination and its empyreal reflection is the same as human Life and its spiritual repetition. But as I was saying—the simple imaginative Mind may have its rewards in the repetition of its own silent Working coming continually on the spirit with a fine suddenness—to compare great things with small—have you never by being surprised with an old Melody—in a delicious place—by a delicious voice, felt over again your very speculations and surmises at the time it first operated on your soul—do you not remember forming to you[r]self the singer's face more beautiful that [=than] it was possible and yet with the elevation of the Moment you did not think so—even then you were mounted on the Wings of Imagination so high—that the Prototype must be here after—that delicious face you will see—What a time! I am continually running away from the subject—sure this cannot be exactly the case with a complex Mind—one that is imaginative and at the same time careful of its fruits—who would exist partly on sensation partly on thought—to whom it is necessary that years should bring the philosophic Mind—such an one I consider your's and therefore it is necessary to your eternal Happiness that you not only drink this old Wine of Heaven which I shall call the redigestion of our most ethereal Musings on Earth; but also increase in knowledge and know all things.

.....

—you perhaps at one time thought there was such a thing as Worldly Happiness to be arrived at, at certain periods of time marked out—you have of necessity from your disposition been thus led away—I scarcely remember counting upon any Happiness—I look not for it if it be not in the present hour—nothing startles me beyond

the Moment. The setting sun will always set me to rights—or if a Sparrow come before my Window I take part in its existince and pick about the Gravel. The first thing that strikes me on hearing a Misfortune having befalled another is this. 'Well it cannot be helped.—he will have the pleasure of trying the resourses of his spirit, and I beg now my dear Bailey that hereafter should you observe any thing cold in me not to but〔=put〕it to the account of heartlessness but abstraction—for I assure you I sometimes feel not the influence of a Passion or Affection during a whole week—and so long this sometimes continues I begin to suspect myself and the genuiness of my feelings at other times—thinking them a few barren Tragedy-tears—

(*The Letters* I, pp. 184~6)

「僕が天才と心について考えていることを，君に総て知ってもらえたらと思う。しかしその点に関しては，君は僕の胸中奥深くすっかり知り尽していると思う。そうでなければ，これ程迄長く僕と付き会ってこなかったであろうし，君の親友として価値ある者だとは思ってくれなかったであろう。ところで，ついでに一こと言っておきたいことで，最近僕の心を占めているものがある。それは増々僕の謙虚さを深めて，従順になることができるということなんです。つまり真実はこうなんです。天才とはある種のエーテルのような化学薬品みたいで，中性的な知性の固りに作用する偉大な力をもっているものなんだ。しかし天才には何ら個性はなく，これといって決めうる性格がない。独自の自己をもつ者で最高の位に立つものは権力者だと言いたい。しかし，一つの主題に頭をつっ込んでしまったが，これは確かに5年の研究と3冊の八折判でも十分論じきれない問題だ。更に想像力について話したいと願っている。だから親愛なるベイリー，できればあの不愉快な出来事はもう考えないで欲しい。どうか，それから生じる被害については物ともしないでくれ，きっとだ。今週クリップスに手紙を書いて，僕がどこに居ても時々出来事を全て手紙で知らせてくれるように書いておく。それでうまくいくと思う。だから，ヘイドンに突然冷淡さが見られたからと言って，一人悩まないでくれ，どうかお願いだ。想像力は信頼しうるものだと言ったら，君は一瞬驚いてそれで終ってしまうと同じように，あなたの心配ごとも，きっと終ってくれるのではないかと思う。僕は心を動かす感情の神聖さと，想像力の真以外は何物も確信しない。想像力が美として捕えるものは真に違いない。美が以前に存在していてもいなくても，何故なら，愛についてと同じように，我々の情熱についても同じ考えを持っているから情熱はその純化の極(きわみ)において，精粋としての美を作り出すのです。要するに，僕の最初の本〔『エンディミオン』第一巻；訳者注〕と，この前送った小さな歌〔*"O Sorrow"*；訳者注〕によってこのお気に入りの考察が解って頂けるでしょう。その詩にこれら(愛と情熱)の中で作用したあり得べき形式の空想のもとで書き表わされたものなのです。想像力はアダムの夢にたとえられる。目が覚めた

ら夢が真実だったと。僕はこの問題についてこと更熱心なのは，どうしてあるものが真であるか，とわかるまで一貫的な推理では認識できなかったからです。しかしわからなければならない。たとえ偉大な哲学者でも，かつて数多くの反対を押し切らずに，目標を達することができたでありましょうか。たとえどんなことであれ，ああ，思想よりも感覚の生活だ。それは「青春の姿をした美影（ヴイジョン）」であって，来たるべき実体の影なのだ。そして次のように考えると更に確信を得るのだ。それは僕のもう一つのお気に入りの考察の助けとなってくれるのです。つまり，地上で幸福と呼んだものを更に素晴しい調子で繰返されることによって，今後[22]も味い楽しむであろうことだ。そしてそのように繰返されるといっても，君のように真を飢え求める人よりも，むしろ感覚に喜びを覚える人にのみ訪れるのだ。アダムの夢はここでも役立つのであって，想像力とその天上的反映は，人間生活とその魂の表出と同じものだという確信であると思われる。しかし今言っていたように，純一な想像的精神は，それ自身の沈黙の作業の繰り返しによって絶えず魂に及ぶと，突然パッとその報酬を得ることができるのだ。大きなものを小さなものでたとえるならば，かつてある素適な所で，素適な声で聴いたその懐かしい曲を突然聴いて，再び初めて君の魂に働きかけたその時のことを，ああこうと推察したことを再び覚えたことはなかったかい。君はその歌い手の顔をあり得ぬ程に美しく思い描いていたのを覚えていないかい。しかもその瞬間は心の昂揚のためにそうは思わなかった。そういう時には想像力の翼にのって高く翔け上っていたのであり，その原型は今後も現われるに違いない，その美しい顔をまた見ることになるでしょう。なんという時間を！　僕は絶えず主題からそれてしまう。確かにこのことは複雑な心の持ち主には正確に当てはまらない。想像力があって，同時に，その果実に注意深い人，半ば感覚（センセイション）に生き半ば思考に生きる人，そういう人には年月が哲学的な心をもたらしてくれるということが必要なのだ。そういう心は君の心だと思う。従って，君の永遠の幸福にとって必要なことは，君が単に地上の古き酒を飲むだけでなく，僕にいわせるとその酒をこの地上における最も精粋的（エーテル）な冥想の再消化と呼ぶが，それと知識を増し，総てのことを知ることが君には必要なのだ。

……

多分君は一度，ある決められた時期に，世間的な幸福というものが訪れると思ったことがあろう。君の性格からして，必然的にそう思われるが，私は幸福をあてにした覚えはない。現時点においてそうでなかったら，幸福を求めない。この瞬間以外は何も心を動かすものはないのだ。沈む夕陽はいつも私の心を落着かせてくれる。或いは雀が窓の前に来れば，その存在の一部となって砂利の中をつつく。誰かに不幸があったと聞くと，私の心に浮かぶのはこんなこと，「まあそれは止むを得ない。その人は自分の精神（こころ）の資質を試す喜びを得ているのだから」と。だから親愛なるベイリー，今お願いだから今後私に何か冷淡なところを認めたら，無情だと思わないで，放心のせいだと思ってくれ。というのはまる一週間というもの情熱，つまり感情の影響というものを時々感じなくなってしまうんだ。それが時々かなり長く続くので，他の時になってみると，自

分自身と自分の感覚の純粋さを疑い始めてしまうのだ。それは不毛の悲劇の涙と思ってしまうのだ。—」

想像力についての信頼性について述べている個所である。この中で「思考よりも感覚(センセイション)の人生を」と述べた時，ロリンズの注で，ギャロッドの説によると，ワーズワースやコールリッジを考えていたという。また「半ば感覚(センセイション)に生き，半ば思考に生きる人，そういう人には年月が哲学的な心をもたらしてくれることが必要なのだ」といっている個所は，ワーズワースの *"Ode: Intimations of Immortality"*, line 190 を念頭に入れているようだ[23]。その前からの一節を揚げてみると，

Though nothing can bring back the hour
Of splendour in the grass, of glory in the flower;
We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind;
In the primal sympathy
Which having been must ever be;
In the soothing thoughts that spring
Out of human suffering;
In the faith that looks through death,
In years that bring the philosophic mind. (*Ode: Intimations of Immortality* 11. 181–190)

この最後の "In years that bring the philosophic mind." の the philosophic mind は，物を見極めた賢識ある心，物事を広く包含する静かな心，賢明な心[24]等ととれる。キーツにとって，senations の世界が欲しいのであって，半ば思考的なワーズワースの態度を皮肉って，philosophic な心，物わかりのいい人になるだろうと言っている。既にワーズワースの詩的態度と，自分の想像力に対する考え方を比較した時，詩的態度は違っていることをつきとめている一文である。

(11) 1817年12月31日　To B. R. Haydon

この手紙の最後に

I met Wordsworth on Hamstead Heath this Morning. (*The Letters* I, p. 195)「今朝ハムステッド・ヒースでワーズワースに会った」とある。ここで初めてワーズワースに会ったことになる。ロリンズの注によると，キーツは Monkhouse の家で12月15日頃ワーズワースに会っていると T. O. Mabbott は言っていると記している。ついでに注では，この日12月31日はロンドンとその近郷は深い霧だったという。

〔4〕 1818年（キーツ22歳）

(1) 1818年1月5日　To George and Tom Keats の中でワーズワースに会ったことを述べている。

This day I promised to dine with Wordsworth and the Weather is so bad that I am undecided for he lives at Mortimer street I had an invitation to meet him at Kingstons—but not liking that place I sent my excuse—What I think of doing to day is to dine in Mortimer Street (wordsth) and sup here in Feathers^{ne} Buildg^{s} as Mr Wells has invited me—On Saturday I called on Wordsworth before he went to Kingston's and was surprised to find him with a stiff Collar. I saw his Spouse and I think his Daughter—I forget whether I had written my last before my Sunday Evening at Haydon's—no I did not or I should have told you Tom of a young Man you met at Paris at Scott's of the name of Richer I think—he is going to Fezan in Africa there to proceed if possible like Mungo Park—he was very polite to me and enquired very particulary after you—then there was Wordsworth, Lamb, Monkhouse, Landseer, Kingston and your humble Sarvant.　(*The Letters* I, pp. 197～8)

「今日ワーズワース氏と食事をすることを約束したのだが，天候が悪いので決めかねている。というのは彼はモーティマー街に住んでいて，キングストンで会うように招待を受けている。でもあそこは好きじゃないので断っておいた。今日何をしようかと思っていることはモーティマー街で（ワーズワース）と食事をすることとウェルズ氏が招いてくれた時の，フェザーストーン屋敷のここで夕食をとるかだ。土曜日[25]にはキングストンの家に行く前にワーズワースを訪ねた。驚いたことに彼は硬いえり（カラー）をつけていた。奥さんと娘さんだと思う人に会った（ロリンズ注によると娘の Dolla Wordsworth でなく，Miss Hutchinson だと Kathleen Coburn は言っている。)。この前の日曜日の晩〔注. 12月28日〕ヘイドンの家でのことを書いたかどうか忘れてしまった。また書かなかったなら話をしておきたいのだトム。パリのスコットの家で会った若い男についてだが，確か名前はリッチャー〔ロリンズ注によるとJoseph Ritchie : *The Letters* I, p. 196〕だと思うが，彼はアフリカのフェザンへ行く予定で，そこへもしできるならマンゴパークのように探険するのだそうだ。私にはとても親切で，お前のことを特に心配していた。ところでヘイドンの家ではワーズワース，ラム，マンクハウス，ランドシーア，キングストンそしてお前のつつましい公僕(の私)が居た。」

キーツは1月3日にもワーズワースに会っている。その時の印象が硬いえりをつけていたことに驚いている。何かワーズワースの硬骨漢を思わせるようだ。1月5日と食事ではホーマーやシェークスピア，ミルトンやヴァージル等について話し合っている[26]。

(2) 1818年1月10日 To B. R. Haydon の中で，

: and I am convinced that there are three things to rejoice at in this Age—The Excursion Your Pictures, and Hazlitt's depth of Taste. (*The Letters* I, p. 293)

「確かに今うれしいことが三つある。ワーズワースの "*The Excursion*" と君〔注，ヘイドン〕の絵とハズリットの趣味の深さ。」と言ってワーズワースの "*The Excursion*"（『逍遙』）を読み味わっている。

(3) 1818年1月23日 To Benjamin Bailey の中で，

—I have seen a good deal of wordsworth. (*The Letters* I, p. 212)

と最後に一言添えてある。1月はかなりワーズワースに会っていると言っているが，1月3日と5日の2回は会っているようだ。

(4) 1818年1月23，24日の To George and Tom Keats の23日分の手紙に

; the Landseers enquired after you particularly—I know not whether Wordsworth has left town— (*The Letters* I, p. 214)

「ランドシーア一家はあなたのことをとりわけ尋ねていた。ワーズワースはロンドンを去ってしまったのかどうか分らない」と言って心配している。既にワーズワースは去っていたことをこの時は知らないようだ。

(5) 1818年2月3日 To J. H. Reynolds の中ではワーズワースに対して，批判的になっている。

It may be said that we ought to read our Contemporaries. that Wordsworth &c should have their due from us. but for the sake of a few fine imaginative or domestic passages, are we to be bullied into a certain Philosophy engendered in the whims of an Egotist—Every man has his speculations, but every man does not brood and peacock over them till he makes a false coinage and deceives himself—Many a

man can travel to the very bourne of Heaven, and yet want confidence to put down his halfseeing. Sancho will invent a Journey heavenward as well as any body. We hate poetry that has a palpable design upon us—and if we do not agree, seems to put its hand in its breeches pocket. Poetry should be great & unobtrusive, a thing which enters into one's soul, and does not startle it or amaze it with itself but with its subject.—How beautiful are the retired flowers! how would they lose their beauty were they to throng into the highway crying out, "admire me I am a violet! dote upon me I am a primrose! Modern poets differ from the Elizabethans in this. Each of the moderns like an Elector of Hanover governs his petty state, & knows how many straws are swept daily from the Causeways in all his dominions & has a continual itching that all the Housewives should have their coppers well scoured: the antients were Emperors of vast Provinces, they had only heard of the remote ones and scarcely cared to visit them.—I will cut all this—I will have no more of Wordsworth or Hunt in particular—Why should we be of the tribe of Manasseh, when we can wander with Esau? why should we kick against the Pricks, when we can walk on Roses? Why should we be owls, when we can be Eagles? Why be teased with "nice Eyed wagtails," when we have in sight "the Cherub Contemplation"?—Why with Wordsworths "Matthew with a bough of wilding in his hand" when we can have Jacques "under an oak &c"—The secret of the Bough of Wilding will run through your head faster than I can write it—Old Matthew spoke to him some years ago on some nothing, & because he happens in Evenning walk to imagine the figure of the old man—he must stamp it down in black & white, and it is henceforth sacred—I don't mean to deny Wordsworth's grandeur & Hunt's merit, but I mean to say we need not be teazed with grandeur & merit—when we can have them uncontaminated & unobtrusive. (*The Letters* I, pp. 223-5)

「私々は現代詩人を読むべきだと言われるかもしれない。ワーズワースやその他の詩人は当然それに値いするでしょう。しかし，二三の素晴らしい想像的な文章や，家庭的な文章があるからといって，自己主義者の気紛れから芽生えたある哲学を，押しつけられねばならないものだろうか。人は誰でも自分の考察を持っている。しかし人は偽りごとを作り上げ，自らを騙す程にはその考えをじっと抱き，そして人に見せびらかすようなことはしないものだ。多くの人は天国の縁まで行くことはできる。それでも自分が半ばしか見なかったことを書くには自信を欠くものだ。サンチョは他の人と同じように天国への旅を思いつくだろう。我々に対して明らかに意図をもっ

た詩は嫌いだ。もし同意しないと，ズボンのポケットに手をつっ込んで（ふくれて）しまうようだ。詩は偉大であるが押しつけがましくあってはならない。人の魂の中に入ってくるものでなければならない。詩それ自体で人の魂をびっくりさせたり目を見張らせたりするのではなく，その主題（サブジェクト）がそうでなければならない。隠れている花はなんと美しいのだろう。大通りに群って，「賞めて下さい，私はスミレです！可愛がって下さい，私は桜草です」などと叫んでいたら，すっかり花の美しさを失ってしまうのです。現代の詩人はエリザベス朝時代の詩人とこの点で違うのです。つまり現代の詩人はハノーバー選挙候のように，自分の小さな国を支配し，自分の領地の公道から毎日何本麦わらが掃き出されたかを知っていたり，絶えず主婦達に銅製の道具をよく磨かせたりしたくてたまらないでいる人なのだ。一方昔の詩人は，広大な領地の皇帝で，遠い領地のことはただ聞くだけで，訪ねてみようとも思わない。こういう現代詩人はとにかく切り捨てよう。ワーズワースもハントもこれ以上とりわけて必要としないだろう。エサウ[27]と共に歩ける時に，なぜマナセの民となっていなければならないのか。バラの花の上を歩けるのに，何故棘（トゲ）を蹴ちらかされなければならないか。鷲になれるのに，何故フクロウでなければならないのか。『ケルビムの冥想』を目にするのに，何故『美しい目をしたセキレイ』に悩まされなければならないのか。『樫の木などの下』にジェイクィズがいるのに，ワーズワースの『手に野生りんごの枝を持ったマシュー』でなければならないのか。野生りんごの枝の秘密は私が書くよりも早く，君の頭の中を駈けめぐるだろう。何年か前，老いたマシューは何かつまらぬことをワーズワースに話したのだ。そしてたまたま夕方の散歩で老人の姿を思い浮べて，ペンで書きとめたのにちがいない。それ以来この詩は神聖なものになってしまったわけだ。私はワーズワースの壮大さや，ハントの長所を否定するつもりはない。しかし，壮大さや長所によって悩まされる必要がないということも一こと言おうとするつもりだ。我々はそれらが汚されずに，そして押しつけられずにいることができるのだから。」

ワーズワースの利己的な哲学を無理矢理押しつけられるのはもう御免だ，と彼の利己主義に辟易している一文である。詩は自ずと人の心の中に入ってくるものであって押しつけがましくあってはならないという。隠れた花の方が美しいという。ワーズワースの『手に野生りんごの枝をもったマシュー』は *"The two April Morning"*, line 59 からの引用であるが，キーツはもはやワーズワースの壮大さに覚めた目をもって見るようになっている。

(6) 1818年2月19日 To. J. H. Reynolds では蜘蛛のたとえを出して心のあり方を述べている。

Nor will this sparing touch of noble Books be any irreverance to their Writers—for perhaps the honors paid by Man to Man are trifles in comparison to the Benefit done by great Works to the 'Spirit and pulse of good' by their mere passive existence.

Memory should not be called knowledge—Many have original Minds who do not think it—they are led away by Custom—Now it appears to me that almost any Man may like the Spider spin from his own inwards his own airy Citadel—the points of leaves and twigs on which the Spider begins her work are few and she fills the Air with a beautiful circuiting: man should be content with as few points to tipe with the fine Webb of his Soul and weave a tapestry empyrean—full of Symbols for his spiritual eye, of softness for his spiritual touch, of space for his wandering of distinctness for his Luxury—But the Minds of Mortals are so different and bent on such diverse Journeys that it may at first appear impossible for any common taste and fellowship to exist between two or three under these suppositions—It is however quite the contrary—Minds would leave each other in contrary directions, traverse each other in Numberless points, and all last greet each other at the Journeys end—A[n] old Man and a child would talk together and the old Man be led on his Path, and the child left thinking—Man should not dispute or assert but whisper results to his neighbour, and thus by every germ of Spirit sucking the Sap from mould ethereal every human might become great, and Humanity instead of being a wide heath of Furse and Briars with here and there a remote Oak or Pine, would become a grand democracy of Forest Trees. It has been an old Comparison for our urging on—the Bee hive—however it seems to me that we should rather be the flower than the Bee—for it is a false notion that more is gained by receiving than giving—no the receiver and the giver are equal in their benefits—The flower I doubt not receives a fair guerdon from the Bee—its leaves blush deeper in the next spring—and who shall say between Man and Woman which is the most delighted? Now it is more noble to sit like Jove that to fly like Mercury—let us not therefore go hurrying about and collecting honey-bee like, buzzing here and there impatiently from a knowledge of what is to be arrived at: but let us open our leaves like a flower and be passive and receptive—budding patiently under the eye of Apollo and taking hints from eve[r]y noble insect that favors us with a visit—sap will be given us for Meat and dew for drink—I was led into these thoughts, my dear Reynolds, by the beauty of the morning operating on a sense of Idleness—I have not read any Books—the Morning said I was right—I had no Idea but of the Morning and the Thrush said I was right—seeming to say—

'O thou whose face hath felt the Winter's wind;

Whose eye has seen the Snow clouds hung in Mist
And the black-elm tops 'mong the freezing Stars
To thee the Spring will be a harvest-time—
O thou whose only book has been the light
Of supreme darkness which thou feddest on
Night after night, when Phœbus was away
To thee the Spring shall be a tripple morn—
O fret not after knowledge—I have none
And yet my song comes native with the warmth
O fret not after knowledge—I have none
And yet the Evening listens—He who saddens
At thought of Idleness cannot be idle,
And he's awake who thinks himself asleep.'

Now I am sensible all this is a mere sophistication, however it may neighbour to any truths, to excuse my own indolence—so I will not deceive myself that Man should be equal with jove—but think himself very well off as a sort of scullion-Mercury or even a humble Bee—It is not matter whether I am right or wrong either one way or another, if there is sufficient to lift a little time from your Shoulders. Your affectionate friend

John Keats— (*The Letters* I, p. 231～3)

「崇高な書物にちょっとしか触れなくても，作者には失礼に当らないだろう。というのは，人が人に払う敬意というものは，単に受身の存在だからといって，偉大な作品が『善なる魂と鼓動』に払う恩恵に比べたら，つまらないものである。記憶は知識だとは言えない。人は多く自分では思っていないが，独自の心を持っている。ただ習慣に導かれてしまうが。今私には思えるのだが，たいていの人は蜘蛛のように，自分自身の内部から自分の空中の要塞をつむぎ出している。蜘蛛は，わずかな葉先や枝先に足場をかけて，空中に美しい網を張りめぐらす。人は蜘蛛と同じように，魂の繊細な編み糸をごくわずかな先端につけて，天上のつづれ織りを編みなすことで満足せねばならない。それは精神の目にとって象徴で満ち満ちており，精神的な触れ合いには柔らかく，贅美を識別しようと歩き回るのに十分な空間がある。しかし人間の心は皆違っていて，方角の異った旅路に向けられているので，初めはそう推測しても共通の趣味や繋(けい)情は二・三の人の間には存在しえないと思われるかもしれない。しかしそれは全く逆で，心というものは，互いに反対の方角に離れていって，数知れぬ点でお互いに交錯しながら，終には旅の終りにおいてお互

いに出合うものだ。老人と子供が共に語り合っても，老人は自分の道の方に行ってしまい，子供は自分の考えにふけってしまう。人は議論したり，主張したりするべきではなくて，隣人に結果を囁くだけにすべきだ。そうすれば，総ての精神の芽は，霊妙な土壌から慈養分を吸いとって，人は皆偉大になりうるであろう。そして人間性については，たとえばあちこちにぽつんと樫の木や松の木が生えていて，残りはハリエニシダとか野バラしかない広い荒野といったようなものではなく，森の木のように壮大な民主主義精神を形づくるものとなるでしょう。更に押し進めていうと，古いたとえがある。蜜蜂の巣のことだ。我々は蜜蜂よりもむしろ花になるべきだと思う。何故ならば与えることよりも，受けとることの方がより多く得られるという考えが誤っているからだ。そうではなく，受けとる者も与える者も利益においては同じなんだということ，花も疑いなく蜂から正当な報酬を得ているのだ。花びらは次の春には更に真っ赤になる。そして男と女とでは，どちらが歓びが大きいかなどと誰も言わないであろう。さて，マーキュリーのように飛び回るよりも，ジョーブのように坐っている方がずっと気高いのだ。従って，我々は蜜蜂のようにせわしなく飛び回っては蜜を集めるのではなく，また何にとまったらいいのかと思って，いらいらとあちこちぶんぶん飛び回るのではなくて，花のように我らの花びらを開いて，受け身になって受容的になろう。じっと太陽（アポロ）の目の下で蕾をつけて，親切にも訪れてくれる気高い昆虫から暗示を得よう。樹液は我々の肉として与えられ，露は飲みものとして与えられる。私がこういう考えに導かれたのは，親愛なるレノルズ，朝の美しさが怠惰な気分に働きかけたからだ。まだ本を読んではいないが，朝はそれでいいと言った。朝のことしか考えなかったし，つぐみもそれでよしと言った。ちょうどこう言うように—

おおつぐみ　顔には冬の風覚え
　目には霞と垂れる雪の雲を見た。
凍れる星の合間より　黒ずむ楡の梢見た。
お前にとって春こそは刈り入れ時だ—
おおつぐみ　お前にとっての唯一の本は
闇の中での光であった。夜（よ）につぐ夜（よる）は
その光を糧にした。太陽神（フィーバス）の去った時
お前にとって春は三倍の朝—
おお知識をあせり求めるな—知識がなくとも
わが歌は　暖かくなれば自然に蘇える。
おお知識をあせり求めるな—知識がなくとも
夕べの時は聴いている—怠惰な思いに
悲しむ者は怠惰でなんかあり得ない。

自ら眠りを思う者こそ目覚めた者よ。

今私は気がついていることだが，これはたとえ総て真実に近いとしても，自分の怠惰を言訳するための詭弁に過ない。だから人間はジョーヴ〔ジュピター〕と同等であると自ら騙すのではなく，人は自分を一種の台所働きのマーキュリーだとかマルハナバチにすぎないものだとか思った方がよい。私が正しいか，あれこれ間違っているかなどは問題でない。もしも君の肩から少しでも時間を取りあげ（て痛みを忘れ）られればそれで十分である。君の心からの友，ジョンキーツ」この手紙の中で Spirit and pulse of good" をワーズワースの "*The Old Cumberland Beggar,*" line 77 から引用している[29]。また，"passive and receptive" は "*Expostulation and Reply*" の wise passiveness をきっと心に抱いていたに違いないとロリンズは書いている[30]。キーツの蜘蛛と花のたとえを挙げて[31]，花における受容的な態度をとろうとする。『つぐみの歌』における「知識をあせり求めるな」ということ，春がくれば自然と歌がよみがえるというのと同じで詩的態度のあり方を言っている。受け身になっての受容性は，ワーズワースの wise passiveness 「賢明な受動性」とかかわって，キーツは想像力のあり方を更に深めていくことになる。

(7) 1818年2月21日　To George and Tom Keats

—I am sorry that Wordsworth has left a bad impression wherever he visited in Town—by his egotism, Vanity and bigotry—yet he is a great Poet if not a Philosopher. (*The Letters* I, p. 237)

「残念なことにワーズワースはロンドンで訪ねた家のどの家でも悪い印象を残したようだ。彼の利己主義や虚栄心や頑迷固陋によって。しかし，たとえ賢明な人ではないとしても，偉大な詩人だ。」と詩人としては認めている。Philosopher は前にも philosophic mind が出てきたので，哲学者というよりも，賢明な人と解したが，ワーズワースの利己主義，虚栄，頑迷，に反撥を覚えながらも詩人としての資質を認めざるを得ない手紙である。

(8) 1818年3月13日　To Benjamin Bailey にあてて，

When I think of Wordsworth's Sonnet 'Vanguard of Liberty! ye Men of Kent!,' the degenerated race about me are Pulvis Ipecac. (*The Letters* I, p. 241)

「ワーズワースのソネット '*Vanguard of Liverty! ye Men of Kent!*' を思うと，私の回りの堕落した連中は吐き気を催す埃みたいだ。」といって，作品に感銘を受けているようだ。そし

て，

—I have never had your Sermon from Wordsworth but Mrs Dilke lent it me—

(*The Lettrs* I, p. 242)

「私はまだワーズワースからあなたの説教を返してもらっていないが，ディルク夫人から貸してもらった」と言っている。

(9) 1818年3月13日　To B. R. Haydon

It has as yet been a Mystery to me how and when Wordsworth went—I cant help thinking he has returned to his Shell—with his beautiful Wife and his enchanting Sister—It is a great Pity that People should by associating themselves with the finest things, spoil them—Hunt has damned Hampstead and Masks and Sonnets and italian tales—Wordsworth has damned the lakes—Millman has damned the old drama—West has damned—wholesale—Peacock has damned sittier Ollier has dammn'd Music—Hazlitt has damned the bigotted and the bluestockined how durst the Man?! he is your only good damner and if ever I am damn'd—I shoul'nt like him to damn me—It will not be long ere I see you, but I thought I would just give you a line out of Devon—

(*The Letters* I, p. 251～2)

「ワーズワースがいつ，どのようにして帰ったか以然として謎です。あの人は自分の殻の中に帰っていったとしか考えられません。美しい奥さんと魅力的な妹さんとです。とても残念なことですが，人々は自分を一番よいものと結びつけることによって自分を駄目にしてしまいます。ハントはハムステッドの悪口を言ってきましたし，仮面劇やソネットやイタリア式物語詩もです。ワーズワースは湖を悪く言ったし，ミルマンは昔の劇をののしったし，ウェストも悪口を言った。全くたたき売だ。ピーコックも風刺を悪評したし，オリアも音楽を悪く言った。ハズリットは頑固者や青踏派をののしった。あの人はどう。彼は君の唯一の良きののしり手だ。もし僕がののしられるのなら一奴が僕をののしるのは好かん。その内遠からずお会いすることでしょうが，デヴォンから一言を言いたいと思ったので一。」ここではワーズワースが湖を悪く言ったと書いてあるが，どういうことなのだろうか。

(10) 1818年3月25日　From B. R. Haydon　キーツの手紙ではないが，ヘイドンからで，

—I have heard nothing of Wordsworth ever since he went, which I take to be

unkind— (*The Letters* I, p. 258～9)

「ワーズワースが帰ってから何も聞いていない。不親切なことだと思う。」とあるが，先のキーツの3月13日の手紙に答えたものである。

(11) 1818年4月8日 To B. R. Haydon では，ヘイドンの手紙に応えて

I am affraid Wordsworth went rather huff'd out of Town—I am sorry for it he cannot expect his fireside Divan to be infallible he cannot expect but that every Man of worth is as proud as himself. O that he had not fit with a Warrener that is din'd at King-ston's. (*The Letters* I, p. 265～6)

「恐らくワーズワースはロンドンから，どちらかというと，むっとして帰っていったようです。残念に思う。自分の暖炉のそばの（ペルシャ）詩集には必ず間違いがあると思うと同じく，立派な人にも自分と同じように誇りがあると思うでしょう。キングストンで食事をしたあのウォーレンのような人と一致しなければいいのですが。」とワーズワースの誇り高さをつついているような言い方である。

(12) 1818年5月3日 J. H. Reynolds

You may be anxious to know for fact to what sentence in your Letter I allude. You say "I fear there is little chance of any thing else in this life." You seem by that to have been going through with a more painful and acute the same labyrinth that I have—I have come to the same conclusion thus far. My Branchings out therefrom have been numerous: one of them is the consideration of Wordsworth's genius and as a help, in the manner of gold being the meridian Line of worldly wealth,—how he differs from Milton.—And here I have nothing but surmises, from an uncertainty whether Miltons apparently less anxiety for Humanity proceeds from his seeing further or no than Wordsworth: And whether Wordsworth has in truth epic passions, and martyrs himself to the human heart, the main region of his song—In regard to his genius alone—we find what he says true as far as we have experienced and we can judge no further but by larger experience—for axioms in philosophy are not axioms until they are proved upon our pulses: We read fine——things but never feel them to thee full until we have gone the same steps as the Author.—I know this is not plain; you will know exactly my meaning when I say, that now I shall relish Hamlet more than I ever have done—Or, better—You are sensible no

man can set down Venery as a bestial or joyless thing until he is sick of it and therefore all philosophizing on it would be mere wording. Until we are sick, we are sick, we understand not;—in fine, as Byron says, "Knowledge is Sorrow"; and I go on to say that "Sorrow is Wisdom"—and further for aught we can know for certainty! "Wisdom is folly"—So you see how I have run away from Wordsworth, and Milton; and shall still run away from what was in my head, to observe, that some kind of letters are good squares others handsome ovals, and others some orbicular, others spheroid—and why should there not be another species with two rough edges like a Rat-trap? I hope you will find all my long letters of that species, and all will be well; for by merely touching the spring delicately and etherially, the rough edged will fly immediately into a proper compactness, and thus you may make a good wholesome loaf, with your own leven in it, of my fragments—If you cannot find this said Rat-trap sufficiently tractable—alas for me, it being an impossibility in grain for my ink to stain otherwise: If I scribble long letters I must play my vagaries. I must be too heavy, or too light, for whole pages—I must be quaint and free of Tropes and figures—I must play my draughts as I please, and for my advantage and your erudition, crown a white with a black, or a black with a white, and move into black or white, far and near as I please—I must go from Hazlitt to Patmore, and make Wordsworth and Coleman play at leap-frog—or keep one of them down a whole half holiday at fly the garter—"From Gray to Gay, from Little to Shakespeare"—Also as a long cause requires two or more sittings of the Court, so a long letter will require two or more sittings of the Breech wherefore I shall resume after dinner.—

Have you not seen a Gull, an orc, sea Mew, or any thing to bring this Line to a proper length, and also fill up this clear part; that like the Gull I may *dip*—I hope, not out of sight—and also, like a Gull, I hope to be lucky in a good sized fish—This crossing a letter is not without its association—for chequer work leads us naturally to a Milkmaid to Hogarth to Shakespeare Shakespear to Hazlitt—Hazlitt to Shakespeare and thus by merely pulling an apron string we set a pretty peal of Chimes at work—Let them chime on while, with your patience,—I will return to Wordsworth—whether or no he has an extended vision or a circumscribed grandeur—whether he is an eagle in his nest, or on the wing—And to be more explicit and to show you how tall I stand by the giant, I will put down a simile of human life as

far as I now perceive it; that is, to the point to which I say we both have arrived at—' Well—I compare human life to a large Mansion of Many Apartments, two of which I can only describe, the doors of the rest being as yet shut upon me—The first we step into we call the infant or thoughtless Chamber, in which we remain as long as we do not think—We remain there a long while, and notwithstanding the doors of the second Chamber remain wide open, showing a bright appearance, we care not to hasten to it; but are at length imperceptibly impelled by the awakening of the thinking principle—within us—we no sooner get into the second Chamber, which I shall call the Chamber of Maiden-Thought, than we become intoxicated with the light and the atmosphere, we see nothing but pleasant wonders, and think of delaying there for ever in delight: However among the effects this breathing is father of is that tremendous one sharpening one's vision into the heart and nature of Man—of convincing ones nerves that the World is full of Misery and Heartbreak, Pain, Sickness and oppression—whereby This Chamber of Maiden Thought becomes gradually darken'd and at the same time on all sides of it many doors are set open—but all dark—all leading to dark passages—We see not the ballance of good and evil. We are in a Mist—*We* are now in that state—We feel the "burden of the Mystery," To this point was Wordsworth come, as far as I can conceive when he wrote 'Tintern Abbey' and it seems to me that his Genius is explorative of those dark Passages. Now if we live, and go on thinking, we too shall explore them. he is a Genius and superior to us, in so far as he can, more than we, make discoveries, and shed a light in them—Here I must think Wordsworth is deeper than Milton—though I think it has depended more upon the general and gregarious advance of intellect, than individual greatness of Mind—From the Paradise Lost and the other Works of Milton, I hope it is not too presuming, even between ourselves to say, his Philosophy, human and divine, may be tolerably understood by one not much advanced in years, In his time englishmen were just emancipated from a great superstition—and Men had got hold of certain points and resting places in reasoning which were too newly born to be doubted, and too much opposed by the Mass of Europe not to be thought etherial and authentically divine—who could gainsay his ideas on virtue, vice, and Chastity in Comus, just at the time of the dismissal of Cod-pieces and a hundred other disgraces? who would not rest satisfied with his hintings at good and evil in the Paradise Lost, when just free from the inquisition and burrning in Smithfield?

The Reformation produced such immediate and great benefits, that Protestantism was considered under the immediate eye of heaven, and its own remaining Dogmas and superstitions, then, as it were, regenerated, constituted those resting places and seeming sure points of Reasoning—from that I have mentioned, Milton, whatever he may have thought in the sequel, appears to have been content with these by his writings—He did not think into the human heart, as Wordsworth has done—Yet Milton as a Philosopher, had sure as great powers as Wordsworth—What is then to be inferr'd? O many things—It proves there is really a grand march of intellect—, It proves that a mighty providence subdues the mightiest Minds to the service of the time being, whether it be in human Knowledge or Religion—I have often pitied a Tutor who has to hear "Nom^{e}: Musa"—so often dinn'd into his ears—I hope you may not have the same pain in this scribbling—I may have read these things before, but I never had even a thus dim perception of them; and moreover I like to say my lesson to one who will endure my tediousness for my own sake—After all there is certainly something real in the World—　(*The Letters* I, pp. 278-83)

「あなたの手紙の中でどの文章を僕が仄めかしたかお分りになりたいでしょう。『この人生には，他に何ら見込(チャンス)みはないと思います。』といっているところです。その言葉によると，あなたは僕と同じ迷路をもっと苦しい，強い興味をもって通り抜けてきたかのように思われます。ここまでは僕も同じ結論に達しました。そこからの枝葉は数多く出ていて，その内の一つはワーズワースの天才についての考えです。その手助けとして，金が世間の富の最高基準であるという考え方で，ワーズワースがミルトンと〔詩を基準にして〕どの位い違うかということです。これからは推測の域をでません。というのは，ミルトンはワーズワースよりも人間性についてどうも関心が薄かったようで，彼はワーズワースよりも更に深く見るからなのか，或いはそうでないのかがはっきりしないからなのです。そしてワーズワースは実際，叙事詩的情熱を持っていたのかどうか，また彼の詩の主要領域である人間の心に殉じた人なのかどうかも定かでないからであります。彼の才能だけについては，経験の範囲内で，彼の言うことは真実だと分るのです。それ以上のことは，もっと大きな経験がなければ判断できません。何故なら哲学の公理は，我々の鼓動によって証明されなければ公理とは言えません。我々が美しい詩を読んでも，作者と同じ段階の経験を踏んでいなければ，十分感じとることはできないのです。これでははっきりしないと思う。こう言えば僕の言おうとすることが正確に分るでしょうう。僕は今，ハムレットをこれまでよりももっとよく味い得るであろうと。それともこの方がいい。お気づきのように，人は好色を獣的だとか面白くないものだとか決めつけるのは，好色に飽きてはじめて言えることであって，それについ

て哲学じみたことを言っても言葉の遊びに過ぎないものなのです。飽きない内は分らないのです。要するに，バイロンが言うように『知識は悲しみなり』です。そして僕はこう言い続けます，『悲しみは知恵なり』と。そして更に，我々の知る限り，確かに『知恵は愚かなり』と。だから僕がワーズワースとミルトンから逃げ出した訳がお分りになるでしょう。そして頭の中にあるものから更に逃げ去ろうとすることを。それは，ある種の文は正方形で，あるものはきれいな卵形で，あるものは何か球形で，他のものは扁平球形で—そしてどうしてねずみ取りのように二つのぎざぎざの刃のあるものであってはならないのでしょう。私の長い文はそのぎざぎざの類のものとお分り頂ければ，それで十分です。何故かというに，そのバネにごく微妙に，軽く触れるだけで，そのぎざぎざした刃がぴんとはねて，うまく締まった形になるでしょう。そうしたら君のパン種を中に入れると僕の断片でできたおいしそうなパンができ上るというものです。今言ったねずみ取りがうまく扱いかねるとしたら，ああどうしよう，僕のインクは他の方法で汚すことは全くできません。たとえ長い文を書きなぐっても，気まぐれな考えに遊んでしまうに違いなく，全ページを重々しく書いたり，軽々しく書いたりしてしまうし，おかしなことを言ったり，比喩や修辞を好き勝ってに使ったりしてしまうに違いありません。好きなようにチェッカーをさして，自分の有利と君の博識を求めて，白の駒に黒の駒を重ねて王にしたり，黒に白を重ねたり，好きなようにあっちこっち，黒又は白の中に動かしたりするに違いないのです。僕はハズリットからパットモアに移ったり，ワーズワースとコールマンに馬跳びをさせたり，この内の一人を休日半分をガーター跳びさせて，『グレイからゲイへ，リトルからシェークスピアへ』と跳びさせたりするに違いありません。それにまた，長い訴訟は法廷に二度かそれ以上坐る必要があるように，長い手紙には，食後もその為に戻ってきて，二度かそれ以上腰を置かねばならないことになるのです。

ところでカモメとかシャチとかウミネコとかいったものを見ませんでしたか。それをこの行にもってきて適当な長さにして，この余白を埋めて下さいませんか。ちょうどカモメのように，僕も水に漬かりたいのです。できれば見えなくならない程にです。カモメのように，かなり大きい魚を運よく摑まえられればいいのですが。この手紙のバツは連想が無くはないのです。何故なら市松模様は当然乳絞りの女を連想させ，乳絞りの女はホガースを，ホガースはシェークスピアを，シェークスピアはハズリットを，ハズリットはシェークスピアに連り，かくしてエプロンの紐をちょっと引くだけで，美しい鐘の音を鳴らし—しばらく鳴らしておきましょう，御辛棒願って。ところでワーズワースに戻りましょう。彼は広がりのある洞察力（ヴイジョン）を持っているのか，それとも限られた壮大さしか持っていないのかどうかである。巣の中の鷲なのか，翼を広げて飛んでいる鷲なのかである。もっとはっきりさせるために，この巨人〔ワーズワース〕のそばに立ったら，どのくらいの背丈かを見せるために，僕が今理解している範囲内で，人生の比喩を書いてみましょう。つまり我々二人が到達したと言える点までです。さて，僕は人生をたくさんの部屋のある

大邸宅にたとえます。その内の二部屋しか記述できません。残りの部屋のドアはまだ私には締められたままなのです。我々が入る第一の部屋は幼児の部屋，あるいは無思想の部屋と呼びます。その部屋には，我々が何も思考しない限りそこにとどまっています。長い間そこに居ます。そして第二の部屋のドアは広く開かれていて，中の明るい様子が見えるにもかかわらず，急いで中に入ろうとしません。しかし終には我々の中に考える本性が目覚めてきて，自ずと中に入るのですが，第二の部屋に入るやいなや，この部屋を処女思想の部屋と呼びますが，その光と雰囲気に陶然として，ただ快い驚異しか見えず，いつまでも喜びに浸っていて，ぐずぐずとそこにとどまっていたい気持になるのです。しかしながら，ここで息づいていることが多くの効果を生み出し，その効果の中には，我々の洞察力（ヴィジョン）を鋭くして，人間の心と本性に立ち入ってくるという途方もない効果が出てくるのです。そして人生は悲惨や失望，苦しみや病気や圧迫などに充ち満ちていることを，我々の神経に納得させる効果があるのです。そのことによって，この処女思想の部屋は次第に暗くなってくるのと同時に四面のドアが開かれるのです。しかし皆暗く，暗い通路に通じているのです。善と悪の均衡が分らないのです。我々は靄の中にあって—今の我々もそんな状態にいるのですが—『神秘の重荷』を感じるのです。私の考える限りでは，『ティンタン・アビー』を書いた時，この点までワーズワースは来ていたと思ます。そして彼の才能はそれらの暗い通路を探っていたと思われます。さて，もしも我々が生きて考え続けるならば，我々もまた探索するでしょう。彼は天才であり我々よりも優れていたので，できるところまで我々よりも更に遠く探って発見をし，それに光を注いでくれるでしょう。この点でワーズワースはミルトンよりも深かったと思わざるを得ません。ただその考えは，個人の精神の偉大さというよりも，知性が一般的に，集団的に進歩したということにより多く依存しているからだと思ます。ミルトンの『失楽園』と他の作品から類推して，彼の哲学は，たとえ人間的であれ，神的であれ，年端も行かぬ者にとってもかなり理解できるものであると言っても必ずしも生意気ではないと思います。当時イギリス人はひどい迷信から解放されたばかりで，人々は理性的思考の確かな論点と拠りどころを摑んだのです。それらはまだ新しく生れたばかりだったので疑われもせず，ヨーロッパの大衆にあまりにも反対されていたので，空霊的で本当に神聖なものだと考えられた訳です。ズボンの前垂袋やその他諸々の見苦しいものを無くしたばかりの時に，〔ミルトンの〕コウマスに出てくる美徳や悪徳や貞節についての考えを，誰が反対しえたでありましょうか。スミスフィールド（の火刑場）での宗教裁判や火刑から自由になったばかりの時に，ミルトンが『失楽園』で善悪のことを仄めかしたことに，誰が満足しない者がいたでありましょうか。宗教改革はこのように直接大きな利益を生み出したのですから，新教は神（プロテスタンテイズム）の直接の目のもとにあると考えられたでしょうし，新教自身に残っていた独断と迷信は，いわば再生されて，理性的思考の拠りどころと一見確かな論点とを構成したのであったのです。こう述べてきたことからして，ミルトンは結果としてどのようなことを考えたとしても，彼の書いたものによってこうした考えに恐らく満足していたように思

えます。彼はワーズワースがしたように，人間の心の中に入っていくことを考えなかった。しかし哲学者としてのミルトンは，ワーズワースと同じ位偉大な力を確かに持っていました。それでは一体何が推断されるのか。ああ色々なことがある。それは知性の壮大な進歩が実際にありうることを証明しているのです。力強い摂理が最強の精神を征服して，しばらくは時の奉仕にまかせることを証明しているのです。たとえそれが人間の知識であれ宗教であれです。『主格，ムーサ』と耳に響いてくるのをしばしば聞かねばならぬ先生を時々可哀想だなと思いました。君もこの書きなぐりの手紙に同じ苦痛を持たなければいいのですが。以前このようなものを読んだことがあるかもしれません。でもたとえこのようなぼんやりとした認識すらも今までもったためしはありません。更に僕の授業を我慢して僕の為に退屈な話を聴いてくれる人に話してみたかったのです。結局この世の中には確かに何か真実なものがあるのです。……」

このワーズワースの天才論についての回りくどい手紙は，キーツ自身の想像力についての考え方でもある。ワーズワースとミルトンとを比較して，結局ワーズワースは人間性に深く立ち入っていたのではないかということである。いわゆる想像力の第一段階での幼児の部屋或いは無思想の部屋と呼ばれる心の円熟を待っている状態から，第二段階での処女思想の部屋，Maiden（乙女）のバラ色に輝く想いをこう呼んで，想像力の豊かに浮かぶ状態を言ったものと思う。更に通路は，第三段階への大人の部屋へ導かれるものかどうか分らないがそこへの通路は真っ暗らで，人生の苦痛を味わせるところらしい。或いは神秘の重荷（burden of the Mystery）を感じさせるところで，キーツもワーズワースもそこまで入り込んでいるようだ。vision を「ものを見透す力」とみるならば，vision をもって，人間の心と本性に立ち入ることになり，暗い通路をまさぐっていかねばならないようである。

(13) 1818年6月21日 To Thomas Monkhouse ウェールズと湖水地方とスコットランドへ向かう前の日の手紙で，

> I regret not being at home when you called the other day—the more because I shall set out tomorrow morning for the North. I was very much gratified in hearing from Haydon that you so great a Lover of Wordsworth should be pleased with any part of my Poem. (*The Letters* I, p. 297)

「先日君が訪ねてきて下さった時に家に居なかったのはとても残念です。明日の朝北へ向って出発するのでなお更のことです。ワーズワースの大いなる愛読者であるあなたが，僕の詩の何かに感銘されたのではないかと，ヘイドンから聞いた時はとても嬉しく思いました。」ここでは，かつてマンクハウスの家でワーズワース等に会っている。

(14) 1818年6月25日—27日 To Tom Keats 6月25日の木曜日に旅への手紙が始っている中で,

June 26—I merely put *pro forma*, for there is no such thing as time and space, which by the way came forcibly upon me on seeing for the first hour the Lake and Mountains of Winander—I cannot describe them—they surpass my expectation—beautiful water—shores and islands green to the marge—mountains all round up to the clouds. We set out from Endmoor this morning, breakfasted at Kendal with a soldier who had been in all the wars for the last seventeen years—then we have walked to Bowne's to dinner—said Bowne's situated on the Lake where we have just dined, and I am writing at this present. I took an oar to one of the islands to take up some trout for dinner, which they keep in porous boxes. I enquired of the waiter for Wordsworth—he said he knew him, and that he had been here a few days ago, canvassing for the Lowthers. What think you of that—Wordsworth versus Brougham !! Sad—sad—sad—and yet the family has been his friend always. What can we say? We are now about seven miles from Rydale, and expect to see him to-morrow. You shall hear all about our visit.

There are many disfigurements to this Lake—not in the way of land or water. No; the two views we have had of it are of the most noble tenderness—they can never fade away—they make one forget the divisions of life; age, youth, poverty and riches; and refine one's sensual vision into a sort of north star which can never cease to be open lidded and stedfast over the wonders of the great Power. The disfigurement I mean is the miasma of London. I do suppose it contaminated with bucks and soldiers, and women of fashion—and hat-band ignorance. The border inhabitants are quite out of keeping with the romance about them, from a continual intercourse with London rank and fashion. But why should I grumble? They let me have a prime glass of soda water—O they are as good as their neighbors. But Lord Wordsworth, instead of being in retirement, has himself and his house full in the thick of fashionable visitors quite convenient to be pointed at all the summer long. When we had gone about half this morning, we began to get among the hills and to see the mountains grow up before us—the other half brought us to Wynandermere, 14 miles to dinner. The weather is capital for the views, but is now rather misty, and we are in doubt whether to walk to Ambleside to tea—it is five miles along the borders of the Lake. Loughrigg will swell up before us all the way—I

have an amazing partiality for mountains in the clouds. There is nothing in Devon like this, and Brown says there is nothing in Wales to be compared to it. I must tell you, that in going through Cheshire and Lancashire, I saw the Welsh mountains at a distance. We have passed the two castles, Lancaster and Kendal. 27 th—We walked here to Ambleside yesterday along the border of Winandermere all beautiful with wooded shores and Islands—our road was a winding lane, wooded on each side, and green overhead, full of Foxgloves—every now and then a glimpse of the Lake, and all the while Kirkstone and other large hills nestled together in a sort of grey black mist. Ambleside is at the northern extremity of the Lake. We arose this morning at six, because we call it a call it a day of rest, having to call on Wordsworth who lives only two miles hence—before breakfast we went to see the Ambleside water fall. (*The Letters* I, pp. 298-300)

「6月26日—形式上単に日付を置く。というのは，時間や距離というようなものは（計れ）ないのです。ただそれによっていつの間にか来ただけで，始めてウィナンダー〔＝ウィンダーミア〕の湖や山々を見ることができました。とてもそれらの景色を書き表わせません。期待をはるかに越えています。美しい水，淵まで緑の岸辺，島々，雲にまで廻る山々。今朝はエンドムーアを出発して，ケンダルで17年間戦争という戦争に出ていたという兵士と一緒に朝食をとりました。それからボウネスへ昼食をとりに来ました。ボウネスというのは湖に面していて，そこで食事をとったばかりで，今手紙を書いています。オールをとって島の一つに漕いで行き，食事のためにマスをとりに行きました。魚は穴の開いた箱の中に飼われています。僕は給仕にワーズワースのことを聞くと，知っていると言って，二三日前にここへ来て，ローサー家のことを聞いて回ったそうです。そのことをどう思いますか。ワーズワース対ブルーアム，悲しいかな，悲しいかな，悲しいかな，しかもその家族とは常に友人だったのです。何と言ったらいいのだろう。我々は今ライダル〔マウント〕から7マイルの所に居ます。明日彼に会いたいと思っています。訪ねたことは皆聞かせてあげましょう。

この湖にとってたくさんの欠点があります。土地とか水とかという点ではないのです。そうだ，それについて我々が持っている二人の見解があって，それは最も崇高な優しさについてです。それは決して薄れて忘れ去ることはないでしょう。人生が二つに別けられていること，老人と若者，貧乏人と金持，といったことを忘れさせてくれます。そして人間の感覚的洞察力を精錬して，一種の北極星となって，決して目蓋をとじることなく開けたままで，偉大な力の驚異には確固としたものとなるのです。私の言う欠点はロンドンの瘴気のことです。ロンドンはしゃれ男や兵士達，上流社会の女達，それに黒バンドつき帽子達〔＝学生？〕の無知で汚されていると思

います。辺境の住民達は，ロンドンの上流階級の人に絶えず接しているので，身の回りのロマンスに全く調和していないのです。しかし何故僕がこぼすかって。住民の人は僕においしい一杯のソーダー水を飲ませてくれます。ああなんと善良な隣人なんでしょう。しかしワーズワース卿は隠棲しているにもかかわらず，身の回りや家に上流階級の訪問者達を一ト夏中さし招いて，都合いいようにしてとり囲まれているのです。午前中半ば程歩いたら，丘の合い間に入り始めて，目の前に山々がそびえ立っているのが見えてきました，後半でウィナンダーミア〔＝ウィンダーミア〕につき，14マイル歩いて食事をしました。天気は景色には上々ですが，今はいくらか霞がかかっています。アンブルサイド迄歩いていってお茶を飲めるかどうか，この湖の縁にそって5マイルあります。ラフリッグ山が途中ずっと目の前に盛り上っているでしょう。雲の中の山には驚く程愛着を覚えます。デヴォンにはこのようなものは無いでしょうし，ブラウンが言うにはウェールズにもこれと比較できるものは無いそうです。是非言っておきたいことはチェシャーやランカシャーを通り過ぎる時，遠くの方にウェールズの山々が見えたことです。我々は二つの城と，ランカスター，ケンダルを通って来ました。

27日―我々は昨日ウィナンダーミア湖の縁にそって，ここアンブルサイドへ歩いてやってきました。木の生えた岸辺や島々はとても美しいです。行く道は曲りくねった細道で両側にはうっそうと木が生えていて，頭上は緑で，下にはジギタリスの花が一杯咲いており，時折湖がちらとのぞいて見えます。道中カークストン山や大きな山々が一種の薄墨色の靄の中にうずくまってよりそっていました。アンブルサイドは湖〔＝ウィンダーミア〕の一番北の端にあります。今朝6時に起きました。休みを切り上げたのです。ここからたった二マイル先に住んでいるワーズワースを訪ねなければいけませんので，朝食前にアンブルサイドの滝を見に行って来ました。……」。いよいよ湖水地方へ来てワーズワースに会おうとしてライダルマウントの近くへ来たことを書いている。湖水地方の美しさには相当感激していて，手紙を読んでも楽しい足取りを思わせる。しかし現実の湖のそばではワーズワースが選挙に走り回っているようで，何とも言えない切ない，気持を覚えたようだ。

(15)　1818年　6月27，28日　To George and Georgiana Keats

We ate a Monstrous Breakfast on our return (which by the way I do every morning) and after it proceeded to Wordsworths He was not at home nor was any Member of his family—I was much disappointed. I wrote a note for him and stuck it up over what I knew must be Miss Wordsworth's Portrait and set forth again & we visited two Waterfalls in the neighbourhood, and then went along by Rydal Water and Grasmere through its beautiful Vale—then through a defile in the Mountains into Cumberland and So to the foot of Helvellyn whose summit is out of sight

four Miles off rise above rise—I have seen Kirkstone, Loughrigg and Silver How—and discovered without a hint "that ancient woman seated on Helm Craig."

(*The Letters* I, pp. 302-3)

「帰路我々は大そうな食事をとり（ちなみに毎朝のことなのですが），その後ワーズワースの家に向いました。彼は家におらず，家族の方もおりませんでした。とてもがっかりです。書き置きをしておきました。ワーズワース嬢の肖像にちがいないと思う上につけておき，また出発しました。近くの二つの滝を訪ね，ライダル湖とグラスミア湖のそばにそって歩き，美しい谷合を通っていきました。それから山の隘路を抜けて，カンバーランドあたりに入り，ヘルヴェリン山のふもとを通りました。その山の頂上は4マイル先に高くそびえているのですが，見えませんでした。カークストンやラフリッグやシルバーハウ山を見ました。そして何のヒントも得ずに「ヘルム・クラッグ山に坐るいにしえの女」〔今は The Lady at the Organ と呼ばれている：筆者〕がすぐ分りました。」キーツがワーズワースに会いに行ったが会えなかったことは有名である。そのがっかりした様子がありありと浮んでくるようだ。

(16) 1818年 6月29日，7月1；2日，To Tom Keats. 6月29日に，弟夫妻への手紙と同じように，

& therefore I must tell you without circumstance that we proceeded from Ambleside to Rydal, saw the Waterfalls there, & called on Wordsworth, who was not at home. nor was any one of his family. I wrote a note & left it on the Mantlepiece.

(*The Letters* I, pp. 305～6)

……

Wordsworth's house is situated just on the rise of the foot of mount Rydall, his parlor window looks directly down Winandermere; I do not think I told you how fine the vale of Grassmere is, & how I discovered "the ancient woman seated on Helm Crag."

(*The Letters* I. p. 307)

「従って委細ははぶいて言うと，アンブルサイドからライダル〔マウント〕迄行って，そこで滝を見，それからワーズワース氏を訪ねましたが，氏は家に居ず，家族の方も居ませんでした。書き置きを暖炉の上に置いてきました。

……

ワーズワースの家はライダル山の麓のちょっと登った所にあり，広間の窓からはウィナンダーミア湖を真直ぐに見下ろせます〔ライダル湖と思われるが：筆者〕。グラスミアの谷間の美しさを話してなかったと思います。それに「ヘルム・クラッグ山に坐わるいにしえの女」を見つけたこと

も。これは前の手紙と同じである。

(17) 1818年10月27日　To Richard Woodhouse ここでは詩人の資質について述べている。

Ist As to the poetical Character it-self, (I mean that sort of which, if I am any thing, I am a Member; that sort distinguished from the wordsworthian or egotistical sublime; or which is a thing per se and stands alone) it is not itself—it has no self—it is every thing and nothing—It has no character—it enjoys light and shade; it lives in gusto, be it foul or fair, high or low, rich or poor, mean or elevated—It has as much delight in conceiving an Iago as an Imogen. What shocks the virtuous philosopher, delights the camelion Poet. It does no harm from its relish of the dark side of things any more than from its taste for the bright one; because they both end in speculation. A Poet is the most unpoetical of any thing in existence; because he has no Identity—he is continually in for—and filling some other Body—The Sun, the Moon, the Sea and Men and Women who are creatures of impulse are poetical and have about them an unchangeable attribute—the poet has none; no identity—he is certainly the most unpoetical of all God's Creatures. If then he has no self, and if I am a Poet, where is the Wonder that I should say I would write no more? Might I not at that very instant have been cogitating on the Characters of saturn and Ops? It is a wretched thing to confess; but is a very fact that not one word I ever utter can be taken for granted as an opinion growing out of my identical nature—how can it, when I have no nature? When I am in a room with People if I ever am free from speculating on creations of my own brain, then not myself goes home to myself: but the identity of every one in the room begins to press upon me that, I am in a very little time annhilated—not only among Men; it would be the same in a Nursery of children: I know not whether I make myself wholly understood: I hope enough so to let you see that no dependence is to be placed on what I said that day.　(*The Letters* I, pp. 386-7)

「先ず第一に詩人的性格のものについてである。(どちらかというなら，僕もその一員であるような類の性格をいうのであって，ワーズワース的な，つまり自己中心的な崇高さ，つまりそれはそれ自体で存在し，それだけで独立しているものであって，詩的性格とは違ったものを言う。) 詩人的性格は一個のものでなく，自己がなく，全てであり何もない。それは性格を持たない。光と影を楽しみ，心からの喜びにひたり，たとえそれが美しくあれ，醜くあれ，身分が高くあれ低く

あれ，金持であれ貧乏であれ，心の卑しい者であれ気高い者であれ構わない。イモージェンと同じようにイアゴのことも考えると喜びを覚えるのです。徳のある哲学者を驚嘆させることでも，カメレオン的詩人を喜ばせるのです。物事の暗い面を味っても傷をうけないのは，明るい面への味いも傷をうけないと同じだからです。何故ならその両方は考察に終るからです。詩人はこの世に存在するものの中で一番詩的でないものです。何故なら詩人は独自性を持たぬからです。絶えず他のものに入り，他の本体を満たすからです。太陽，月，海，そして衝撃(インパルス)の動物である男や女，こうしたものは詩的であり，不変の属性をそなえている。詩人には何もない。独自性がない。詩人は確かに神の創造物の内で一番詩的でないのだ。もしそれなら詩人は自己がなく，僕が詩人なら，もはや僕が詩を書いているのではないと言っても何処に不思議があろうか。まさにその瞬間，僕はサターンやオプスの性格のことに思い耽っていると言えないだろうか。こう白状するのも惨めなことだが，僕の言う言葉のどの一言も，僕の独自性から出てきた意見だとは当然認められないということだ。僕には性格がない時にどうして認められましょうか。僕が人と一緒に部屋に居る時，もし自分の頭脳の作り出すものを考えていないとするならば，その時，僕自身が自己に戻るのではなくて，部屋の中にいる一人一人の独自性が僕に押し入ってきて，一瞬のうちに僕は滅却されてしまうのです。大人達の中だけでなく，子供の育児部屋にいる時も同じだろう。すっかり解って頂いたかどうか分りませんが，先日私が言ったことについて，何も信頼がおけないということが解って頂ければ十分なのです。」

ワーズワースの詩にあるエゴイスティクなものに対する反対の考えを表わしたもので，キーツにとって詩人は Identity（魂の独自性）[32] を持たないものだという。他の独自性が自分を占めてしまうので，自己中心的でなくなってしまうのである。キーツによく言われる「自己滅却」は「己れを滅して実相に入る」ような程積極的でないかもしれないが，自ずと自己を滅して他者に入って合一してしまうものに思える。

(18) 1818年12月16～18，22，29(？)，31，1819年1月2～4日　To George and Georgiana Keats　弟のトムキーツの死が報じられている中で，

> How are you going on now? The goings on of the world make me dizzy—
>
> (*The Letters* II, p. 137)

ロリンズの注によると，ワーズワースの "*Michael*" の中に出てくる。"the goings on/Of earth and sky" を知らなかったのだろう。"The world is too much with us" は覚えていたかもしれないとある。

〔5〕 1819年 (キーツ23歳)

(1) 1819年3月8日　To B. R. Haydon

Conversation is not a search after knowlege, but an endeavour at effect. In this respect two most opposite men, Wordsworth and Hunt, are the same.

(*The Letters* II, p. 43)

「(彼らの) 会話は知識を求めるものでなくて，結果をあれこれ熱心に話すものだ。この点で最も反対の二人，ワーズワースとハントは同じだ。」ワーズワースの結果の報告を皮肉っているものと受けとれる。

(2) 1819年3月3日か4日の手記にもワーズワースの名前が出てくる。

, as he likes half of Wordsworth,...　(*The Letters* II, p. 69)

(3) 1819年3月19日　To the George Keatses

—This morning I am in a sort of temper indolent and supremely careless: I long after a stanza or two of Thompson's Castle of indolence—My passions are all asleep from my having slumbered till nearly eleven and weakened the animal fibre all over me to a delightful sensation about three degrees on this side of faintness—if I had teeth of pearl and the breath of lillies I should call it langour—but as I am 〔+especially as I have a black eye〕 I must call it Laziness—In this state of effeminacy the fibres of the brain are relaxed in common with the rest of the body, and to such a happy degree that pleasure has no show of enticement and pain no unbearable frown.

(*The Letters* II, pp. 78-9)

今朝私は一種の倦怠感を覚え，全く注意力を欠いた状態にありました。トムソンの詩『怠惰の城』の一・二連を読みたいと思っております。私は11時近く迄うとうととしていたので，情熱もすっかり眠りこけてしまって，身体中の動物繊維がゆるんでしまいもう三度こちら側に振れたら失神しそうな位，気持のいい状態になっています。もし私が真珠の歯と百合の息を持った美人だったら，倦怠と呼ぶのですが，しかし私は（特に目の回りが黒くなっているので）怠惰と呼ぶし

かありません。こんなめめしい状態なので，頭の繊維が残りの体の部分と一緒に皆弛んでしまって，こういう幸福な度合は，その喜びが誘惑の素振を見せないのと，苦痛が堪えがたいしかめ面を見せないのと同じ程度なのです。」

ここでトムソンの詩を読みたいということで注によると，ワーズワースの "*Vernal Ode*" 86 行の "pleasing indolence" をキーツは知っていたと言っている。一応その行を挙げてみると，

> *Him* rather suits it, side by side with thee,
> wrapped in a fit of pleasing indolence,
> While thy tired lute hangs on the hawthorn-tree,
> To lie and listen—till o'er-drowsèd sense
> Sinks, hardly conscious of the influence—
> To the soft murmur of the vagrant Bee. (*Vernal Ode,* ll. 85-90)

同じ手紙の中で，

> I go amongst the buildings of a city and I see a Man hurrying along—to what? The Creature has a purpose and his eyes are bright with it. But then as Wordsworth says, "we have all one human heart"—there is an ellectric fire in human nature tending to purify— (*The Letters* II, p. 80)

「僕は町の建物の中に出掛けていって，人が急いで歩いているのを見る一何の為に？　人は目的をもっていて，目はそれで輝いている。しかしワーズワースが言うように，『我らは皆同じ人間の心を持っている』。人間には物を純化しようとする電気の火がある。……」ロリンズの注によるとこのワーズワースの言葉は "*The Old Cumberland Beggar*" line 153, を指している。

(4)　1819年3月31日　To Sarah Jeffrey

> I have been always till now almost as careless of the world as a fly—my troubles were all of the Imagination—My Brother George always stood between me and any dealings with the world—Now I find I must buffet it—I must take my stand upon some vantage ground and begin to fight—I must choose between despair & Energy—I choose the latter—though the world has taken on a quakerish look with me, which I once thought was impossible—
>
> 'Nothing can bring back the hour

Of splendour in the grass and glory in the flower
I once thought this a Melancholisit dream—　(*The Letters* II, p. 113)

「僕は今迄いつもハエのように世間には注意を払わないでいた。僕のかかわっていたことは全て想像力についてであった。弟のジョージはいつも僕と世間とのつき合いの間に立っていた。今僕は世間と戦わねばならないと思う。僕は相手よりも有利な立場に立って戦い始めねばならぬ。僕は絶望と活力とのどちらかをとらねばならないとすると，後者を選ぶ。たとえ世間が僕にとってクエーカー教徒のような目で見たとしても，それはかつてあり得ないと思ったが—
もはや何ものも鏡の中の輝きの時間も
花の中の輝きの時間も取り戻せない。
これはかつてメランコリーな人の夢だと思っていた。」

この二行はワーズワースの"*Ode: Intimations of Immortality*" 181行よりいくらか間違って引用されているという。これについては先に挙げてある。

(5) 1819年6月9日　To Sarah Jeffrey

I have put no more in Print or you should have had it. You will judge of my 1819 temper when I tell you that the thing I have most enjoyed this year has been writing an ode to Indolence,　(*The Letters* II, p. 116)

「僕はもはや印刷にしなかった，さもなければあなたはそれを手に入れていただろうが。僕が今年最も楽しかったことは怠惰の賦を書いていたことで，それをあなたに告げる時，この1819年の僕の気分がどんなものかお分りになることでしょう。」ここで，ワーズワースの"*To my Sister*" 31行を暗示しているというが，29行から見てみると，

Some silent laws our hearts will make,
Which they shall long obey:
We for the year to come may take
Our temper from to-day.　(ll. 29-32)

(6) 1819年9月21，22日　To Richard Woodhouse　火曜日に

Yes I should like a bit of fire—at a distance about 4 feet 'not quite hob nob'—as wordsworth says—　(*The Letters* II, 169)

「そうだちょっと火が欲しい—4フィート離れた所で，ワーズワースが言うように，『全く親しそうでなく』」—

「全く親しそうでなく」は "*The Idiot Boy*" 289行よりの引用で，

The owlets through the long blue night
Are shouting to each other still:
Fond lovers! yet not quite hob nob,
They lengthen out the tremulous sod,
That echoes far from hill to hill. (*The Idiot Boy*, ll. 287-291)

となっている。

〔6〕 1820年（キーツ24歳）

(1) 1820年2月(?) To Fanny Brawne

Be very careful of open doors and windows and going without your duffle grey—God bless you Love!— (*The Letters* II, p. 262)

「どうか開いたドアや窓には十分注意して下さい。そして灰色のダッフル無しに出掛けないよう注意して下さい。あなたに幸あれ—」

ワーズワースの "*Goody Blake*" の6行の "Good duffle grey" か "*Alice Fell*" の57行 "let it be of duffile grey" かを引用しているという。

Oh-what's the matter? what's the matter?
What is't that ails young Harry Gill?
That evermore his teeth they chatter,
Chatter, chatter, chatter still!
Of waistcoats Harry has no lack,
Good duffle grey, and flannel fine;
And coats enough to smother nine. (*Goody Blake and Harry Gill*, 11. 1-8)

'And let it be of duffile grey,
As warm a cloak as man can sell!'
Proud creature was she the next day,

The little orphan, Alice Fell!　(*Alice Fell*, ll. 57-60)

(2) 1820年6月21日頃　To Charles Brown

I met x x x〔=Monkhouse〕in town a few days ago, who invited me to supper to meet Wordsworth, Southey, Lamb, Haydon, and some more; I was too careful of my health to risk being out at night.　(*The Letters* II, pp. 298-9)

「数日前町で×××〔=マンクハウス〕に会いました。彼はワーズワースやサウジーやラムやヘイドンやその他の人に会うようにと夕食会に招いてくれました。でも私は健康に注意をしておりますので，夜危険をおかして外へ出ることはできませんでした。」

これがワーズワースへの最後の言及かと思われる。結局キーツはワーズワースに会いたいと思いながらも二年前の正月以来会えないで終ってしまった。

ワーズワースについて言及している個所と引用句等をロリンズの注によって，年代順に一通り掲げてみた。キーツのワーズワースへの意識の流れがどんなものかを追ってみたが，詩との内容的な検討については次回に譲りたい。(1982年8月，元気な Richard Wordsworth 氏らと共に早朝 Grasmere 湖を散歩した想い出をもって記す。)

注

1) Robert Gittings: *John Keats*. (Heinemann, 1980) p. 52.
2) 佐藤　清：『ジョン・キーツ研究，特に詩作の心理に関連して』(南雲堂，1977)。
阪田勝三：『ジョン・キーツ論考，自己解体としての想像力』(南雲堂，1976)。
松浦　暢：『キーツ―その夢と現実』(吾妻書房，昭54)。
3) R. Gittings: op., cit. p. 53.
4) 手紙の引用は Hyder E. Rollons (ed.): *The Letters of John Keats* 1814-1821 2 vols. (Harvard University Press, 1976) からする。以下 *The Letters* と略す。
5) *The Letters*, p. 117.
6) 拙訳は出口保夫：『キーツ全詩集』(白凰社，1978)，を参照する。
7) *The Letters*, I, p. 118.
8) Gittings: op, cit. p. 99.
9) *Ibid*, p. 111.
10) *The Letters*, I, p. 129.
11) *The Letters*, I, p. 134.
12) キーツの手紙の訳に当っては，田村英之助：『キーツ　詩人の手紙』(冨山房　昭52)，松浦　暢：『キーツの手紙』(吾妻書房，1974)，小川和夫：『キーツのオード　鑑賞と分析』(大修館書房，1980) 等の中で収録されているものは参照し，適訳語を使用させて頂きました。なお原文は一応そのまま載せロリンズの指摘の間違いは正しい方にした。句読点，字の大小の間違いは原文のままにし，〔　〕をもって永井の注を入れた。また細かいロリンズの注は必要のない限りはぶいた。

13) Rollins の注, *The Letters*, p. 151.

14) Thomas Hutchinson (ed.) : *Wordsworth Poetical Works*. (Oxford U. P. 1981) p. 151.

15) H. W. Garrod (ed.) : *Keats Poetical Works* (Oxford U. P. 1972) p. 443 では語字が多少違っている (Lives→Stands 等)。

16) Wordsworth Poetical Works, p. 460–2. 以後 W. P. W と略す。

17) Rollins 注, *The Letters*, p. 158.

18) I Am not One who much or oft delight／To season my fireside with personal talk,／Of friends, who live within an easy walk,／Or neighbours, daily, weekly, in my sight :／And, for my chance-acquaintance, ladies bright,／Sons, mothers, maidens withering on the stalk,／These all wear out of me, like Forms with chalk／Painted on rich men's floors, for one feast-night.／Better than such discourse doth silence long,／Long, barren silence, square with my desire ;／To sit without emotion, hope, or aim,／In the loved presence of my cottage-fire,／And listen to the flapping of the flame,／Or kettle whispering its faint undersong. (Personal Talk I, ll. 1–14), (W. P. W. p. 382).

19) Rollins の注で, マーティンは本の出版と販売会社の社員。

20) Rollins 注. p. 173.

21) Rollins 注. p. 174.

22) 小川和夫 : op. cit. p. 361 では「今生以後」と解されている。

23) Rollins 注. *The Letters* p. 186。

24) 田部重治 :「ワーズワース詩集」(岩波文庫, 1981) p. 175。

25) 1月3日。

26) Gittings op. cit. p. 177.

27) Rollins の注では, He refers to Genesis and to Judges, vi 15, vii 23, etc., とある。

28) Rollins 注. *The Letters*. p. 224.
Matthew is in his grave, yet now,／Methinks, I see him stand,／As at that moment, with a bough／Of wilding in his head. (ll. 55–60) (W. P. W. p. 381).

29) Rollins 注. *The Letters*. p. 231.

30) Rollins *Ibid*. p. 232.

31) Rollins の注によると, Pliny と Swiff から借りているという。

32) 小川和夫 : op. cite. p. 33。